

明治 2 年、蝦夷地が北海道と改称されてから今年でちょうど 100 年を迎えることとなる。「風雪百年輝く未來」、これはこの記念すべき年に当たり、本道の歴史と将来を単的に象徴し、全道民の心に深く浸透しつつある言葉である。土木の行政、技術の両面から見たとき、本道の立地、地形、気象の特殊性から考えねばならない種々の問題がある。すなわち、道路網密度の不足と整備率の低少、冬季交通確保の問題、利水率の低いまま放置されている原始河川とその管理上の諸問題、港湾、漁港の本州と異なる管理体系とその立地条件、気象、海象に起因する工事上の問題等、さらには、近時労務管理の関係も含めて検討され始めた通年施工の問題等、本道特有の難問をかかえているが、われわれは、住み良い明るい北海道の建設に向って懸命な努力を傾注している次第である。

土木各部門については紙面の関係上記述できないが、開道 100 年に当たり、道路を通じて、開拓に努力された先人の偉業を偲びつつ、その歴史を振り返ってみることとする。

明治維新以前

本道の道路事業は、北辺の防備を目的として 1799 年幕府直轄で行なわれた様似猿留山道の開さくが始まる。1803 年までには、函館から長万部、室蘭、猿留、広尾、大津、釧路、厚岸を経て根室に至る約 660 km を、また 1817 年までには木古間山道、千歳越、網走越、斜里越等約 410 キロの開さくが行なわれている。1821 年以降 34 年間本道は松前藩の所領とされ、その間道路の開さくは省りみられなかったが、1854 年幕府が函館に奉行所を置き、再び幕府直轄地とするにおよび、黒松内越、余市岩内間、小樽銭函間、雄冬山道、関内太櫓間、瀬棚島牧間等西南地域において 250 km の新道開さくが行なわれている。

明治維新以後

(1) 開拓使時代 (明治 2 年～15 年) : 明治 2 年、開拓使が札幌に設置されて本道の開発が開始された。明治 4 年、ケプロンの来道により、函館、室蘭、千歳、札幌間延長 176 km の馬車道を築造し、これを「札幌本道」と呼んだ。この時代には、雄大な構想のもとに札幌街路計画や札幌本道以外に約 530 km の道路計画が行なわれて

いる。また明治 13 年、札幌手宮間に本道初の鉄道が建設された。

(2) 3 県時代 (明治 15 年～18 年) : 明治 15 年開拓使が廃止され、本道は函館、札幌、根室の 3 県に分割された。この時代は諸事業萎縮し、道路事業も振わず、160 km 程度の延長をみたに過ぎず、函館江差間、長万部寿都間の馬車道が開さくされたのみである。

(3) 道庁時代 (明治 19 年～昭和 20 年) : 政府は明治 19 年、3 県を廃止し北海道庁を新設し、内閣総理大臣の直属とし拓殖政策の実施に当らせることとした。道庁時代は 4 期に分けられるが、① 初期 (明治 19 年～33 年) の道路整備の特色は、海岸連絡道中心の形から、中央部への貫通路とその支線としての原野道路の整備に主力が注がれたことであり、これは内陸の拓殖の進展を物語るものである。この時代には幹線道路として、札幌上川間、上川網走間、網走釧路間、札幌虻田間が開さくされた。② 10 ヵ年計画期 (明治 34 年～42 年) においては明治 34 年北海道 10 ヵ年計画が樹立され、初めて開発計画のもとに事業を実施することとなった。計画総予算の 46% が道路事業に当てられ、留萌北竜間、浜益新十津川間、名寄興部間等約 4600 km が開さくされ、計画の 52% の実施率となっている。③ 第一期拓殖計画 (明治 43 年～昭和元年) が明治 43 年に樹立され、36% を占める道路関係事業費により、主として町村道と里道に主力が注がれた。築造工法も向上し、新設 5800 km 改良 1160 km の実績となっている。④ 第二期拓殖計画期 (昭和 2 年～20 年) においては、不況と戦乱のため北海道開発の熱意は全くうすれてしまい、道路の新設は約 1800 km と当初計画の 24.9% の達成に止まっている。

⑤ 戦後においては、過大人口の収容のため北海道が大きく浮び上がり、昭和 22 年～26 年の 5 ヵ年は、開拓道路の新設が特に重視された。昭和 25 年北海道開発法が制定され、27 年北海道総合開発第 1 次 5 ヵ年計画 (27～31 年)、第 2 次 5 ヵ年計画 (33～37 年) を経て、37 年には第 2 期開発計画 (38～45 年) が閣議決定され現在に至っている。一方また、北海道の道路整備は、第 1 次 5 ヵ年計画の発足を機にして、近代的道路整備に取り組みされたわけであり、札幌小樽間、札幌千歳間の高速自動車道の着工等往時に比較すると、国道その他重要道路の整備については著しい進展を見ている所であるが、今後は序文で述べた諸問題を真剣に検討のうえ、積極的に解決しなければならないと考えている。

* 正会員 北海道土木部長